

# チベット語訳『大日経』

## 第2章に関するノート(1)

種 村 隆 元

伝法院では密教儀礼研究会において平成22年度より『大日経』第2章「具縁品」のチベット語訳テキストを読み進めており、筆者も研究会に参加させていただいている。『大日経』は言うまでもなく真言宗の根本經典であり、これまでに数多くの優れた研究がなされてきている。しかしながら、『大日経』はサンスクリット語の原典が断片的にしか回収されておらず、チベット語訳テキストは決して易しくはなく、テキスト上の問題が数多く存在する。したがってより良い訳註を作成するため、さらに『大日経』の理解を深めるためには、それらテキスト上の問題に関して考察を施すことは決して無益ではないと考えられる。この小論においては、これらの問題の中からマンダラの語義解釈に関する部分を取り上げ、若干の註を施してみたい。

\* \* \*

まず最初に当該部分のチベット語訳テキストを見てみたい。チベット語訳『大日経』第2章は越智淳仁による「新校訂」版が出版されているが(越智1997)、この越智1997に加えて、筆者が現在利用できる北京版(P)、デルゲ版(D)、ナルタン版(N)、トクパレス写本(sTog)、ラサ版(L)の5つを直接参照した。

de nas yañ bcom ldan 'das la phyag na rdo rjes žug pa | bcom ldan  
'das dkyil 'khor 'di'i miñ ci lags | cī'i slad du dkyil 'khor žes bgyi |  
bcom ldan 'das kyis bka' stsal pa | gsañ ba pa'i dag po dkyil 'khor  
'di ni sañs rgyas 'byuñ ba ste | dkyil ni sñiñ po žes bya'o || 'khor ni  
\*rdzogs pa (P D: *rdzogs pa žes bya* N sTog L) ste | de'i goñ na sñiñ  
por gyur pa gžan med pas | de bas na dkyil 'khor žes bya'o || (P  
f.127r2-3, D f.162v6-7, N f.317v1-3, sTog ff.119r6-119v1, L ff.193v7-  
194r2, 越智 1997:4-8)

(試訳) また世尊に対して金剛手が尋ねた。「世尊よ、このマンダラ  
の名前は何というのでしょうか？なぜマンダラと言われるのでしょ  
うか？」世尊がお答えになった。「ヤクシャの王 (gsañ ba pa'i dag  
po, \*guhyakādhpati) よ。このマンダラとは仏の生起である。[マン  
ダラの] マンダ (maṇḍa) とは sñiñ po のことである。ラ (la) とは  
rdzogs pa のことである。[したがって] それより上に、sñig po と  
なるものは他になく、この理由によりマンダラと言われるのである。」

上に引用したマンダラの語義解釈 (nirukti) の部分は、マンダラ  
(maṇḍala) という単語を maṇḍa と la に分解して、その意味を解釈する  
ものである。『大日経』当該部分のサンスクリット語原文の存在が確認さ  
れていないため、今から問題にしたい sñiñ po と rdzogs pa は取りあえ  
ず翻訳しないでおく。それでは sñiñ po と rdzogs pa のサンスクリット  
語の原語が何なのか、あるいはどのような意味なのかを知るために、ま  
ずは他文献におけるマンダラの語義解釈の部分を参照していくことにし  
たい。まず最初は『秘密集会タントラ (Guhyasamājantra)』の註釈で  
ある、チャンドラキールティ (Candrakīrti) 作『プラディーポードウ  
ヨータナ (Pradīpoddyotana)』である。この文献は『大日経』からの引  
用がいくつか見られることでも知られている。以下に引用するマンダラ  
の語義解釈は『秘密集会タントラ』第4章の章名に対する註釈部分で見

られる。

*Pradīpoddyotana ad Guhyasamājatantra chapter 4, colophon:*  
 maṇḍaṃ sāraṃ samvṛtisatyam, taṃ lāti grhṇātīti maṇḍalam.  
 neyārthaḥ. maṇḍaṃ sāraṃ paramārthasatyam, taṃ lāti grhṇātīti  
 maṇḍalam. (CED p.45, ll.3-5, SED p.117, ll.15-17)

(和訳) [マンダラ (maṇḍala) の] マンダ (maṇḍa) とは精髓 (sāra), すなわち世俗の真理のことであり, それを受け取る (lāti = grhṇāti) のがマンダラである。これは未了義である。マンダ (maṇḍa) とは精髓 (sāra), すなわち最高の真理のことであり, それを受け取る (lāti = grhṇāti) のがマンダラである。

上に見られる語義解釈では, maṇḍala の語を maṇḍa と la に分解し, maṇḍa = sāra (精髓), la = lāti = grhṇāti (<√lā, 受け取る, あるいは, つかむ) として<sup>(1)</sup>精髓=世俗の真理あるいは最高の真理を受け取るものがマンダラであると解釈している<sup>(2)</sup>。同様の解釈の仕方は『ヨーギニーサンチャーラタントラ (Yoginīsaṃcāratāntra)』の註釈である『ウパデーシャヌサーリニー (Upadeśānusārīnī)』に見られる。

*Upadeśānusārīnī ad Yoginīsaṃcāratāntra 5.2:tatra maṇḍaṃ sāraṃ*  
 tasya lānād ādānān maṇḍalam pañcacakrākāraṃ jñātavyam. (PED  
 p.43, ll.3-4)

(和訳) その場合, [マンダラ (maṇḍala) の] マンダ (maṇḍa) とは精髓 (sāra) のことであり, それを受け取るから (lānāt) マンダラであり, [それは] 5つの輪をもった外観をとると知られるべきである。

この場合の解釈の仕方も『プラディーポードゥヨータナ』と同様であり、laを動词语根 lāから派生した名詞 lānaであると解釈している。『ヘーヴァジラタントラ (Hevajratantra)』に対する註釈『ヨーガラトナマーラー (Yogaratanmālā)』においても同様の解釈を見ることができる。

*Yogaratanmālā ad Hevajratantra* 1.5.19c: maṇḍalam ityādi. maṇḍam sāraṃ ity uktam mahāsukhaṃ jñānaṃ lāti gr̥hnātīti maṇḍalam. (S<sub>ED</sub> p.118, ll.27–28, TN<sub>ED</sub> p.43, l.18–p.44, l.6)

(和訳) maṇḍa で始まる [箇所についてであるが], maṇḍa = sāra (精髓) であると説かれるのは大楽であるところの智であり, [それを] 受け取る (lāti = gr̥hnāti) のがマンダラである。

Cf. *Hevajratantra* 2.3.27 :

maṇḍam sāraṃ ity uktam bodhicittaṃ mahat sukhaṃ |  
ādānaṃ taṃ karotīti maṇḍalam mīlanaṃ matam ||

• maṇḍam] em. ISAACSON; *maṇḍalam* S<sub>ED</sub>

• mīlanaṃ em. ISAACSON; *malanaṃ* S<sub>ED</sub>

(S<sub>ED</sub> p.56, ll.7–8)

『ヨーガラトナマーラー』は『プラディーポードゥヨータナ』や『ウパデーシャースサーリニー』と同様の語義解釈をおこなっており、これらの解釈を参照すれば『ヘーヴァジラタントラ』2.3.26は lātiあるいは lānaを ādānaと言い換えているのは明らかである。

以上の文献を参照するのであれば、今問題にしている『大日経』の dkyil ni sñiñ po źes bya'oは maṇḍam sāraṃに相当すると考えて間違いないであろう<sup>(3)</sup>。次に laに相当する部分はどうか。当該箇所のチベット語のテキストは'khor ni rdzogs paとある。この rdzogs paには「完全である」や「満たされている」などの意味があるが、『大日経』でのサンスクリット語の原語が何であり、それがどのように laと関係する

のか今ひとつ判然としない。そこで次にブツダグフヤ (Buddhaguhya) の註釈でどのような説明がなされているか見ていくことにしたい。

\*            \*            \*

周知の通りブツダグフヤの註釈は現在知り得る限りチベット語訳が手に入るのみで、そのサンスクリット語原典の写本の存在は確認されていない。そしてブツダグフヤの註釈のチベット語訳には、シヨンスペル (gZon nu dpal) が「改訂」した、いわゆる「再治本」とシヨンスペルの手が入っていない、いわゆる「未再治本」が存在する。今問題にしている『大日経』のマンダラの語義解釈の箇所に関するブツダグフヤの註を、未再治本、再治本の順に見ていくことにしたい。

#### A. 未再治本

dkyil zés bya ba ni ñiñ po'o || 'khor zés bya ba ni khyab pa'o || zés pa ni mar gyi sñiñ po'am tsan da na gyi sñiñ po dañ 'dra ste | mchog dam pa la bya'o || mar dañ tsa nda na gyi sñiñ po de dag la ni mchog pa'am rdzogs pa med kyañ srid | de dag dañ 'gra ba ma yin nam ze na | sñiñ por 'dra mod kyañ de las kyañ khyad par du gsuñs pa khyab pa zés pa ste | khyab pa ni \*chog (P:mchog D) pa'am yoñs su rdzogs pa'i don to || dkyil 'khor \*di'i (P:'di D) sñiñ po \*chog (P:mchog D) pa'am rdzogs pa zés pa ci'i phyir bya ze na | sañs rgyas bcom ldan 'das bskal pa grañs med par bsod nams dañ ye šes kyi chogs bsags nas | stobs dañ mi 'jigs pa la sogs pa sañs rgyas kyi yon tan gyi chos rnam yoñs su rdzogs nas bla na med pa'i byañ chub tu mñon par sañs rgyas pa'i sñiñ por gyur pa mchog dam pa ste | mchog de las gZan pa btsol mi dgos par des chog ste mi 'gyur ba yoñs su rdzogs pa'o || gañ bla na med pa'i

byañ chub tu mñon par sañs rgyas pa mi 'gyur ba yon̄s su rdzogs  
te | de nyid sñon gyi smon lam gyi śugs kyis sku la sogs pa mi zad  
pa'i rgyan gyi 'khor lor gyur pa dkyil 'khor 'di byin gyis brlabs pas  
na | dkyil 'khor \*di'i sñiñ \*po mchog (D; *pos chog* P) pa źes bya'o || (P  
vol.ñu ff.135r6-135v4, D vol.ñu f.110v1-5)

〔試訳〕「[mañḍala] の mañḍa とは精髓 (sāra) のことである。la とは '満たされている (khyab pa)' の意味である」と [あるが、この場合精髓 (mañḍa = sāra) とは、] ギーの表面にはる薄皮 (\*ghrtamañḍa, mar gyi sñiñ po) (= 最も脂肪の濃い部分) あるいは梅檀の最も良い部分 (\*candanasāra, tsan da na sñiñ po) と同様に最も優れたものに対して述べられる。

【質問】 ギーの表面にはる薄皮や梅檀の最も良い部分の両者には、最上でないものあるいは完全ではないものも存在するので、あるいはそれらと同様ではないのであろうか？

【答論】 精髓と同様ではあるけれども、それよりも優れているものとして述べられているので「満たされている」と説かれており、「満たされている」とは '十分な'あるいは '完全な'を意味するのである。

【質問】 このマンダラの「マンダ」が十分あるいは完全であるとなぜ言われているのか？

【答論】 仏世尊が無量の劫において福德と智慧の資糧を集め、[十] 力や [四] 無畏などの仏のもろもろの特質 (yon tan gyi chos rñams) を完全に満たし、無上の菩提を完全に悟ったことが、マンダ (精髓) となったのであり、[それは] 最も優れたものである。[したがって] その最上のものより他に求められるものは必要ないので、それで十分であり、[それは] 変化せず、完全なのである。変化せず、完全である、無上菩提の完全な悟りそれ自身が、以前の誓願の力により不滅の身体など [= 身・語・心] の装飾の輪となり、このマンダラを加持するので<sup>(4)</sup>、このマンダラのマンダ (精髓) は最上なものであると言われるのである。

## B. 再治本

dkyil ni sñiñ po źes bya'o || 'khor ni rdzogs pa ste źes pa ni mar gyi sñiñ po'am | tsa nda na gyi sñiñ po dañ 'dra ste mchog gam dam pa la bya'o || mar dañ tsa nda na gyi sñiñ po \*dag (D:de P) la ni mi \*mchog (P:chog D) pa dañ ma rdzogs pa yañ srid na de dag dañ 'dra ba yin nam źe na || sñiñ \*por (D:po P)'dra mod kyañ de las khyad par du khyab pa źes gsuñs te | khyab pa ni chog pa dañ | yoñs su rdzogs pa'i don to || dkyil 'khor 'di'i sñiñ po ni ji ltar chog pa dañ rdzogs pa yin źe na | sañs rgyas bcom ldan 'das bskal pa grañs med par bsod nams dañ ye śes kyi tshogs bsags nas stobs dañ mi 'jigs pa la sogs pa sañs rgyas kyi yon tan rnam s yon s su rdzogs te bla na med pa'i byañ chub tu mñon par sañs rgyas pa ni sñiñ por gyur pa mchog (P:chog pa D) dañ dam pa ste | mchog (P:chog D) pa ni de las gźan pa btsal mi dgos par des chog pas mi 'gyur bar yoñs su grub pa'o || gañ bla na med pa'i byañ chub tu mñon par sañs rgyas pa mi 'gyur bar yoñs su grub pa de ñid sñon gyi smon lam gyi śugs kyis sku la sogs pa mi zad pa'i rgyan gyi 'khor lor gyur pa ni dkyil 'khor 'dir byin gyis brlabs pas na dkyil 'khor 'di'i sñiñ po mchog (em.;pos chog P D) pa źes bya'o || (P vol. cu ff.56v4-57r1, D vol. ñu ff. 306v4-307r1)

(試訳)<sup>5)</sup>「[mañḍala の] マンダ (mañḍa) とは精髓 (sāra) のことであり、ラ (la) とは完全なことである」と [あるが、この場合精髓 (mañḍa = sāra) とは、] ギーの表面にはる薄皮 (\*ghṛtamañḍa, mar gyi sñiñ po) (= 最も脂肪の濃い部分) あるいは梅檀の最も良い部分 (\*candanāsāra, tsan da na sñiñ po) と同様に最上のもの、あるいは優れたものに対して述べられるのである。

【反論】 ギーの表面の薄皮と最上の梅檀の両者には最上でないものと

不完全なものもあるので、あるいはそれら両者と同様なのであろうか？

【答論】 精髓と同様ではあるけれども、それより優れているものとして「満たされている」と述べられており、「満たされている」とは「十分な'そして'完全な'を意味するのである。

【質問】 このマンダラの精髓はどのようにして十分そして完全になるのであろうか？

【答論】 仏世尊が無量の劫において福德と智慧の資糧を集め、[十]力や[四]無畏などの仏の諸々の特質を完全に満たし、無上菩提を完全に悟ることが精髓となり、[それが]最も優れている (mchog dan dam pa) ののである。最上であるとはそれより他に求める必要がなく、それで十分であるので変化せず完全なのである。変化せず、完全である無上菩提の完全な悟りそれ自身が、以前の誓願の力により不滅の身体など [=身・語・心] の装飾の輪となり、[それが]このマンダラを加持するので、このマンダラの精髓は最上であると言われるのである。

上に引用したブツダグフヤ註の意図するところは、要約すると、「マンダラとは精髓のことである、しかもそれは最上のあるいは完全なものである。なぜそう言えるのかというと、その精髓とは仏世尊の無上菩提の完全なさとあり、それがこのマンダラを加持しているからである」ということになる。したがってブツダグフヤは maṇḍala を「精髓でありしかも完全なあるいは最上なもの」という karmadhāraya で理解していることになる。そしてこの理由付けは『大日経』本文中の de'i gon na sñiñ por gyur pa gzan med pas 「それより上に、sñig po となるものは他になく」の部分に詳説するものである。次にテキスト上の細かい点であるが、未再治本のブツダグフヤ註の引用する『大日経』の本文では、maṇḍala の la の解釈部分が khyab pa と訳されていることがわかる。シヨンヌベルはそれを現在西藏大蔵経に収められている『大日経』のよう

に rdzogs pa と修正している。しかし de las khyad par du **khyab pa** zes gsuñs te | **khyab pa** ni chog pa dañ | yoñs su rdzogs pa'i don to || の太字部分は明らかに『大日経』本文の語句説明であるのに、この部分は rdzogs pa に修正しきれていないことが分かる。逆に言えばブツダグフヤ註のチベット語訳の当該部分のオリジナルの読みは khyab pa であったことが分かるのである。

\*            \*            \*

以上考察するとブツダグフヤはマンダラの語義解釈においてマンダラを「精髓であり最上のもの」と理解しており、それは文脈上『大日経』本文の内容にも一致する。その一方で『大日経』における「ラ」の解釈部分は、通常よく見られる lāti = gr̥hṇāti とは異なっていることが分かる<sup>(6)</sup>。ここで問題は振り出しに戻ってしまう。通常このような語義解釈の場合 rdzogs pa あるいは khyab pa のサンスクリット語の原語は la で始まる語でなければならない。しかしながら rdzogs pa や khyab pa から推測される原語は paripūrṇa, vyāpta などであり、la で始まる語を見いだすことは困難である。また la を lāti = gr̥hṇāti とする解釈はマンダラの語義解釈以外でも見られる解釈で<sup>(7)</sup>、筆者の調べた範囲では、この点において『大日経』の説くマンダラの語義解釈は「少数派」である。この問題を解決するためにはより広範な文献資料の考察が必要となるので、別稿においてさらに詳しく検討したいと考えている。

#### 参考文献

##### 一次文献

##### サンスクリット語文献

Upadeśānūsāriṇī (Alakakalaśa による Yoginīsaṃcāraṇtantra に対する註釈)。

Yoginīsaṃcāraṇtantra の項目を参照。

Kṛṣṇayamāraṇtantra. S<sub>ED</sub>: Samdhong RINPOCHE and Vrajvallbh DWIVEDI (eds.)

チベット語訳『大日経』第2章に関するノート(1)

- Kṛṣṇayamāritantram with Ratnāvalī Pañjikā of Kumāracandra*. Sarnath:Central Institute of Higher Tibetan Studies, 1992. Rare Buddhist Sanskrits Series 9.
- Kriyāsaṃgrahapañjikā of Kuladatta. TANEMURA 1997 を参照。
- Pradīpodyotana (Candrakīrti による Guhyasamājatantra に対する註釈) . C<sub>ED</sub>:Ch. CHAKRAVARTI (ed.) *Guhyasamājatantrapradīpodyotanaṭīkāṣaṭkoṭivyaḥkhyā* (sic), Patna:Kāshī Prasad Jayaswal Research Institute, 1984. Tibetan Sanskrit Works Series 25. S<sub>ED</sub>:*Guhyasamājatantrapradīpodyotanaṭīkā* (sic) *Ṣaṭkoṭivyaḥkhyā* of Ācārya Candrakīrti. Chapters 3-6 は Dhīḥ. *Journal of Rare Buddhist Texts Research Unit* 49, pp.105-136 所収。
- Yogaratanmālā (Kṛṣṇa あるいは Kāṇha による Hevajatantra に対する註釈)。 S<sub>ED</sub>: Hevajatantra S<sub>ED</sub> を参照。 TN<sub>ED</sub>:Ram Shankar TRIPATHI and Thakur Sain NEGI (eds.) *Hevajatantram with Yogaratnamālāpañjikā of Mahāpaṇḍitācārya Kṛṣṇapāda*, Sarnath:Central Institute of Higher Tibetan Studies. Bibliotheca Indo-Tibetica Series 65.
- Yoginīsaṃcāratāntra. P<sub>ED</sub>:Janardan Shastri PANDEY (ed.) *Yoginīsaṃcāratāntram with Nibandha of Tathāgatarakṣita and Upadeśānusārīṇīvyākhya of Alakakalaśa*. Sarnath:Central Institute of Higher Tibetan Studies, 1998. Rare Buddhist Texts Series 21.
- Ratnāvalī (Kumāracandra による Kṛṣṇayamāritantra に対する註釈)。 Kṛṣṇayamāritantra S<sub>ED</sub> を参照。
- Hevajatantra. S<sub>ED</sub>:SNELLGROVE, David L. (ed. and transl.) *The Hevajra Tantra:A Critical Study*. London:Oxford University Press. 1959. Part II:Sanskrit and Tibetan Texts. London Oriental Series 6.

チベット語文献

- rNam par snañ mdzad chen po mñon par rdzogs par byañ chub pa rnam par sprul ba byin gyis rlob pa śin tu rgyas pa mdo sde'i dbañ po rgyal po žes bya ba'i chos kyi rnam grañs. チベット語訳『大日経』。 翻訳者: Śīrendrabodhi, dPal brtsegs. P: Ota.126, *rgyud*, vol. *tha*, ff.115v2-225v2; D: Toh.494, *rgyud* 'bum, vol. *tha*, ff.151v2-260r7; N: No.447, *rgyud*, vol. *ta*, ff.301r1-455r2; sTog: No.454, *rgyud*, vol. *ta*, ff.102r4-266v6; L: No.462, *rgyud*, vol. *ñā*, ff.176v1-341r4. 第2章 dKyi 'khor tu dgoñ ba'i sñags kyi mdzod の校訂テキストは越智 1997 を参照。
- rNam par snañ mdzad mñon par byañ chub pa rnam par sprul pa'i byin gyis brlabs kyi rgyud chen po'i bśad pa.<sup>(8)</sup> ブッダグフヤ著作の大日経註釈(未再治本)。 翻訳者不明。 P: Ota.3487, *rgyud* 'grel, vol. *ñu*, ff.76v8-337r3. D: Toh.2663, *rgyud*, vol. *ñu*,

ff.65r3-260v7.

rNam par snañ mdzad mñon par rdzogs par byañ chub pa rnam par sphrul pa byin gyis rlob pa'i rgyud chen po'i 'grel pa.<sup>(9)</sup> ブッダグフヤ著作の大日経註釈。シヨンスベルによる改訂版翻訳(再治本)。P:Ota.3490, rgyud 'grel, vol. *cu*, ff.1-230r5. D:Toh.2663, rgyud, vol. *ñu*, f.261r1-vol. *tu*, f.116r7.

## 二次文献

遠藤祐純. 2010. 『藏漢対照『大日経』と『広釈』』東京・ノンブル社, 2010. 蓮花寺仏教研究所研究叢書.

越智淳仁. 1997. 「新校訂『大日経』(続): 第2章入漫荼羅具縁品」『高野山大学論叢』32, pp.29-81.

酒井真典. 1987. 『大日経広釈全訳』京都・法蔵館. 酒井真典著作集第二巻.

HODGE, Stephen. trsl. 2003. *The Mahā-Vairocana-Abhisambodhi Tantra: With Buddhaguhya's Commentary*. London: RoutledgeCurzon.

TANEMURA, Ryugen. 1997. *Kriyāsamgraha of Kuladatta, Chapter VII*. Tokyo: The Sankibo Press, 1997. Bibliotheca Indologica et Buddhologica 7.

## 註

- (1) Cf. Pāṇinīyadhātupāṭha 2.49:lā ādāne.
- (2) 同様の語義解釈は同じくプラディーポードウヨータナの『秘密集会タントラ』第4章第6偈および第7偈に対する註釈にも見られる。Pradīpodyotana ad Guhyasamāja 4.6:maṇḍaḥ. sāraḥ, taṃ lāti gr̥hṇātīti maṇḍalam, tasyākāro yasmin tan maṇḍalākṛtim iti. (C<sub>ED</sub> p.42, ll.23-24, S<sub>ED</sub> p.113, ll.20-21); Pradīpodyotana ad Guhyasamāja 4.7:kāyavākcittānām maṇḍaḥ sāraṃ guhyam. \*ṭam lātīti (em.:talātīti C<sub>ED</sub>; tal lātīti S<sub>ED</sub>) kāyavākcittamaṇḍalam. (C<sub>ED</sub> p.43, ll.5-6, S<sub>ED</sub> p.114, l.5)
- (3) maṇḍa を sāra と解釈する仕方は, maṇḍala とは別の語の語義解釈にも見られる。Kriyāsamgrahaḥpañjikā ch.7, gaṇḍīlakṣaṇa:caturṇām api gaṇḍīnām mūrḍhni dvimātrikatrimātrikasārdhatrimātrikacaturmātrikapramāṇam maṇḍūkaśīrṣākr̥tīḥ. maṇḍam sāraṃ pradhānaṃ maṇḍūkaḥ. saṃbodhijñānaṃ maṇḍūkaśabdenābhīdyate. (TANEMURA 1997: 39, 46) (和訳) ‘四種類のカンディー(比丘を招集するための木製の打ち鳴らし)とともに, 先端に [それぞれ] 2単位, 3単位, 3.5単位, 4単位サイズのカエルの頭の形がある。カエル (maṇḍūka) [という語は], maṇḍa (液体の表面の薄皮/カエル\*), sāra (精髓), pradhāna (主要) という意味である。[したがって] カエル (maṇḍūka) という語により正しい悟りの智

## チベット語訳『大日経』第2章に関するノート(1)

が述べられているのである。(\*註：maṇḍa にはカエルの意味もある。ここでは二つの意味を掛けている。) 興味深いのは、maṇḍa = sāra を正しい悟りの智と解釈していることで、これは以下に問題にするブツダグフヤの註釈に共通している。

- (4) de nīd から byin gyis brlabs pas na までの構文が今ひとつ不明瞭である。再治本には 'khor lor gyur pa ni があるので、この部分が byin gyis brlabs pas の主語の部分であることが示されているが、未再治本においては de (nīd) の部分が主語であるとも理解できる。「不滅の身体などの装飾の輪となったもの (sku la sogs pa mi zad pa'i rgyan gyi 'khor gyur pa)」も具体的に何を意味しているのか不明である。
- (5) 酒井 1987:90-91, 遠藤 2010:197-198, HODGE 2003:94-95 を参照。
- (6) 越智 1997 の当該部分の異読註ではナルタン版、トクパレス写本、ラサ版、ギャンツェ写本(筆者未入手)が 'khor ni rdzogs pa ste の代わりに 'khor ni rdzogs pa bzes pa ste という読みを取っていると報告している。bzes (pa) は √grah の訳語に充てられることがあるので、『大日経』のマンダラの語義解釈においても la = lāti ではないのか考えに達する。しかしながら前三者に関しては原文を確認する限り越智 1997 の報告する 'khor ni rdzogs pa bzes pa ste ではなく、'khor ni rdzogs pa zes pa ste であり、異読を採用しても la = rdzogs pa ということになる。そしてその解釈は上で検討したとおりブツダグフヤ註でも同様である。
- (7) 例えば Kumāracandra は、Kṛṣṇayamāritantra 註 (Ratnāvalī) において、paṭala (章) を以下のように解釈している。Ratnāvalī ad Kṛṣṇayamāritantra chapter1, colophon: sarvājñānapracchādakatvena paṭa iva paṭaḥ, taṃ lāti gr̥hṇātīti paṭalaḥ (SE<sub>D</sub> p.11, ll.17-18)。 (和訳) '[paṭala の] paṭa はすべての無知を覆い隠すので布 (paṭa) と同様であり、それを持つのが章 (paṭala) である。'
- (8) 著作名は大谷大学監修・西藏大蔵経研究会編輯『影印北京版西藏大蔵経—大谷大学図書館蔵—総目録附索引』東京・鈴木学術財団、1962年による。
- (9) 著作名は大谷大学監修・西藏大蔵経研究会編輯『影印北京版西藏大蔵経—大谷大学図書館蔵—総目録附索引』東京・鈴木学術財団、1962年による。

(キーワード)

『大日経』 マンダラ 語義解釈 ブツダグフヤ